

## 草を食む男たち

ひろ凛人

日が暮れて少し肌寒さを覚えるようになった下町の夏祭り。うらぶれた商店街の仮設ステージがいきなり暗転して、バンドネオンの哀切な音色が響き、どうやらプロであるらしいダンサーがスポットを浴びての登場。

直前まで地元の詩吟同好会や舞踊愛好会などの独壇場であったステージ。そこへ突如、木に竹を接ぐような出し物だ。最初は僕も啞然としたが、暫く観ていると、懐かしい想いがふつふつと胸に湧き上がった。

数十年前本場アルゼンチンで見た伊達男と瓜二つの色つぼさ、黒い上着に細身の黒ズボン。黒いソフト帽を目深にかぶり、靴は無論シャツからネクタイまで全部黒黒黒。ニコリともせず、むしろ不貞腐れたような表情で、セクシーな女の白い肢体に妖しくからませる、その細身の黒ズボン。何から何まで、数十年前の、あのブエノスアイレスの夜に見たものとそっくりに思えてきたのだ。

昔も今も、ダンスの上手下手など僕にはわからない。だが当時アルゼンチンが抱えていた国家の憂鬱。その哀しさを身をもって表わすかのような青年ダンサーの暗く翳った眼差し。数十年が過ぎてますます忘れ難さひとしおその青年の面影と、いま目の前でタンゴを踊る日本の若者の風情。それが『瓜二つ』というくらいの判断なら僕にも出来る。

長くスペインの植民地として苦渋をなめ尽したアルゼンチンの民衆。二十世紀はじめに独立して、いつとき栄華の夢に酔ったが、はしやぎすぎて再び鬱陶しい低迷の日々に落ち込んだ国家。

片やこちら、日本という国家も、軍国主義の庄政に苦しんだ後、やっと自由を得て、しばし栄華の夢に酔ったが、やはりはしやぎすぎ。再び多くの人が心晴れない日々を送る体たらく。この両者、どこか似ていないか？

溜息混じりに僕は夜空を仰いだ。冴えてまたたく宵の明星まで切ない。数十年前、あのブエノスアイレスの若者は、限らない心の愁いをタンゴにぶつけていたのだ。いま目の前で踊る日本の若者も、同じ気分でタンゴに熱中しているのかもしれない。い

や、それにしてもー。

一昔前なら血気盛んと言われる年頃の青年が、そもそも何故こんなわびしいステージで、成熟した大人のダンスを踊るのか？ オープンスペースの一角で、見物は無料。だが足を止める人はほとんどいない。僕の横で、中学生くらいと思しき浴衣姿の少女らが数人、摩訶不思議なものを見るような目で、額にビッシリ汗して熱演する若者を眺めているだけなのだ。

しだいに僕は観るのがつらくなった。いちど歩き出そうとした。しかし、後ろ髪を引かれて、再び足を止めた。

「彼らは皆、れっきとしたプロなのよ」

ブエノスアイレスで泊まった安宿のオバちゃんが、僕に意味ありげなウインクをして、話してくれたことを思い出したのだ。

「あの人たちは人に優しいの。特に女にはね」

その優しさは人に習って覚えたものではない。

「出世など、端から考えないタチなのよ」

なるほど、言えてるかもー。

時代が築いたおびただしい数の蜃気楼。それが、瞬時の打ち上げ花火のようなものであったことを見て、抜き難く屈折する心を、彼らは持てあましているのかもしれない。オバちゃん言葉に臍腑を抉られるように思った僕は、とっさにやり慣れないウインクを、不器用に彼女へ送り返したものだ。

いま目の前で狂おしく、あらん限りの力を振り絞って踊る日本の若者も、おそらく、あのオバちゃんが話した類の人なのだろう。金金金で明け暮れ、力づくで女を奪い合うようなヤボを、このタチの男はしないものだ。そういうことは競争社会で勝ち組に入ることしか念頭に無い連中に任せて、俺はひたすらタンゴを踊ってりゃいい。若くしてさっさとどこかでそんな見切りをつけた平成のヤサオトコに違いないのだ。

だが僕は、彼らをあななどの気になれない。あらぬ向きに曲解されては困るが、何を隠そう元来、僕はこういう若者に弱いのだ。強い男は支配者に憧れる。けれど弱い男は、悲しみに黙って堪える人の後ろ姿に憧れる。古来これが日本男子の世界に並び立つ二つの典型的な美意識ではないかと僕は思う。じっくり演歌を聴けば判る。女々しい男が作る唄。弱い男をうたう唄。寂しい人、不安な人にお慰み街道の通行手形を

差し上げる唄。酒は涙か、君恋し、エトセトラ。グレイトヒット曲の多くがそれだと僕は思っている。強がり言って、背に負った痛み黙って耐える。そんな男の後ろ姿に漂う色香。浪花節ではない、お芝居でもない。現実に、そんな哀愁の色香が溢れる男を、僕はたくさん見えてきた。

そして、そういう人に出会うたび、

「世の中、全般、少し演歌にしようよ」

言うそばからアホだオマエはと笑われながら、そんなバカな夢をずっと僕は見てきたような気がする。

今のこの日本で、ほとんど誰も振り向かないタンゴなどシャカリキに踊る若者の生き方も、同じではないか―。

「どうせ俺なんか夢はぐれの半端者。そりゃ俺だって、時には拗ねたりもするぜ、けど自棄にはならない」

踊るタンゴの隙間からそんな若者の眩きが聞こえてきそうな気がした。

なかなかのイケメンだが夢食らう獏だとか、草食む人種などと陰口たたかれ、悔しいだろうが黙ってこらえて、今日もどこかでひたすら情熱のタンゴを踊る男の哀愁、ペーソス。

「めげてもいい、泣いてもいいが、俺は人間、その思いだけはいつも大切にしてくれ。

俺はタンゴで喰い抜いてみる。その根性をよすがに、粘り強く生きてさえいれば、いつかきつとなんとかなるさ。俺もそんな人生、歩いてきたから」

いつの間にか僕は、そんなたわごとをまた独りごちながら、すっかり人通りの絶えた商店街を、ゆっくりゆっくり、うたかたのねぐらに向かつて歩いていった。

「人生、富や名声ではない。納得のいく自分らしさをどう貫くか……」

ほどなく喜寿を迎える男にしてはいささか子どもっぽいが、振り向けば久しぶりに爽やかなものを見た気がして、そよと吹く夜風の心地よさまで、その夜の僕は余すところなく楽しんでいたのである。